科　　目　　名
歴史学と課題Ⅰ **History Ⅰ**

2年　前期　2単位　選択

西　村　正　顯

概　　要

高等学校において日本史が必修教科から外されて久しい。グローバル化が進んだ現在、社会人が仕事をする中で外国人と交わる機会が非常に多くなっている。外国人が自国の歴史を誇りあるものとして滔々と語るのを見るとき、日本の若者が祖国の歴史を語れなかったり曲解していたりする現状は実に悲しいことである。

本講では、日本の古代・中世の歴史を東洋のそれと関連付けながら、我々の祖先がどのように活動し、それぞれの時代を切り開いて行ったかを解説する。

目　　標

1　古代・中世の歴史を連続性のあるものとして理解する。
2　日本人は、外来文化をどのように咀嚼し、独自の文化へと昇華させていったかを理解する。

授業計画

テーマ	内　　容
第1回　文化のはじまり	縄文文化とは、弥生文化とはどのようなものであったのか、その真の姿について考える。
第2回　大和政権と古墳文化	古墳の全国への拡大、その形状や副葬品の変遷などを見ながら、また中国の文献とも照合し、大和政権による国土統一の過程を考える。
第3回　聖徳太子と飛鳥文化	隋が中国を統一し、東アジアが激動の時代に入る中で、聖徳太子は中央行政機構を再編成に取り組みしながら、隋との交流もおこなった。聖徳太子の政治の意味と飛鳥文化の発展について考える。
第4回　律令国家の成立	世界的大国家となった唐を手本として律令制度を完成し、中央集権的国家体制ができあがった。ここでは、大宝律令と官僚制及び農民の負担について検証する。また、遣唐使についても考える。
第5回　聖武天皇の政治と天平文化	奈良時代の政治、特に聖武天皇の治世とその文化、さらには藤原氏の政界における地位の確立過程を考える。
第6回　桓武天皇の政治と平安仏教	奈良時代の鎮護国家の仏教から脱皮し、政治を刷新した桓武天皇の政策を軸に、平安初期の政治と文化を考察する。
第7回　摂関政治と国風文化	他氏排斥に成功した藤原氏の中で、最終的に権力を握った北家が摂関政治を展開した時期は、日本独自の文化が育まれた時代でもある。この時代の政治・文化・仏教を考察する。
第8回　武士の発生と荘園	摂関政治は一方で地方政治の乱れも生じさせた。治安の乱れから自衛のために武装した有力農民が、武士団を結成し、貴族に利用される立場から次第に政権を左右するような力を蓄えていく過程を考察する。
第9回　院政と平氏政権	上皇が私的な立場で政治を動かす院政は様々な混乱を生じさせた。院政下で起きた混乱と、そのなかで政権を掌握した平清盛の政治をみる。
第10回　鎌倉幕府の成立と執権政治	鎌倉幕府を開いた源氏は3代で絶え、北条氏が執権として権力を掌握していく過程について考察する。
第11回　元寇から鎌倉幕府滅亡へ	執権北条時宗が元の襲来を撃退したときが鎌倉幕府権力の絶頂期であった。しかし、元寇の悪影響は甚だしく幕府は急速に衰退していく。この回は、元寇から幕府滅亡に至る過程を検証し、どこに問題があったのか考える。
第12回　鎌倉時代の社会と文化	鎌倉時代には農業生産力が大いに向上し、それにつれて商業や手工業も発達した。政治権力を掌握した武士だけでなく、経済力を身につけた庶民も次第に文化の担い手として成長していった。この回は、鎌倉時代の社会の発展と、それを背景にした文化や宗教について考察する。
第13回　室町幕府の成立と勘合貿易	南北朝の動乱を経て室町幕府が成立したが、権力基盤は強固とは言い難いものであった。そのような状況にあって3代将軍義満は内政と外交に手腕を発揮して幕府の全盛時代を築いた。幕府の権力強化に成功した義満の政策を中心に室町幕府の政治を検証する。
第14回　室町時代の社会と文化	室町時代は、農業・手工業・商業が著しく発展し、庶民が文化の担い手として活躍するようになり、一方で禅宗影響を受けた現在につながる芸術や建築などが多く現れた。具体的にどのようなことが起こったのかを検証することにより、社会状況と文化のつながりを考察する。
第15回　定期考査	前期授業の理解と学習到達度を評価する。

授業方法

テキスト及び各時限に配布する資料をもとに講義を行う。

学習到達度の評価

1）毎時間その授業についてレポートを書かせ、授業の理解度を把握する。
2）授業においては極力質問を発し、学生に歴史上起こった事象について「何故？」と考えさせ、学生の思考態度を評価する。

評価方法

毎時間書かせたレポートと定期試験の成績で評価する。
配点はレポート50点、定期試験50点とする。

教　　材

テキスト「日本史のライブラリー」（とうほう）、配付資料ほか

履修上の注意

1）歴史的事象について「何故？」という気持ちで、自ら授業に積極的に参加し考える。
2）歴史は暗記ものではない。興味をもって流れをつかみ取ること。